

今日の説教のポイント<創世記 19 章 30~38 節>

① ロトが町を出て山に行ったのは正しかったのか？

ロトはツォアルの町を出て山の中の洞穴で娘たちと暮らしました。「ツォアルに住むのを恐れたから」(30)とあります。退廃の町ソドムの経験からそうしたのだとすると、これは良い行為のように思われます。しかし、聖書はそのようにしたからこそ娘たちは父の子を生まざるを得なくなったと語っているのです。ツォアルは主がロトに逃げ込むことを許して下さった町です。ロトは主に問うて町を離れたのでしょうか。誰とも交わらないことは主の御意志ではないと思います。

② ロトも娘たちも責められてはいない。本当の問題は？

ロトの二人の娘にできた子はモアブ人とアンモン人の先祖となりました。両民族はイスラエルを悩ませる周囲の民に含められることもありますし(エズラ記 9:1)、同時に、イエス・キリストの先祖となる系図に入ることになるルツはモアブ人です(ルツ記 1:4)。今日の箇所も、二人の子どもを生んだこと自体に関しては、ロトも娘たちも責めてはいません。この箇所から聞き取るべきことは何でしょうか？

③ 昔も今も血の繋がった子孫の繁栄が大事とされる。それでいいの？

先週初めの新聞に、夫が無精子症で子どものできない夫婦が夫の実父の精子提供を受けて体外受精を実施して 118 人の子どもが生まれた病院の記事が載っていました。夫の遺伝子を残し続けたいがための行為であり、そこまでして血の繋がった子孫を残したいと考える人々が今の時代でもいるのだとあらためて思われました。ロトの娘たちの驚きの行為についても、道徳的な問題を考えるより、血のつながった子孫の繁栄を願う問題について考えなくてはならないと思います。

④ 血の繋がりより、真の神様を知る者の家族こそ神様からの祝福！

旧約聖書は子孫の繁栄に神様の祝福を見ます。しかし、新約聖書は罪の赦しと神の国の約束に神様の祝福を見ます。血の繋がった子孫は「主にある家族」に換えられます。血の繋がりが否定されるのでなく、もっと大きな「主の家族の恵み」を見るようになるのです！